「読むこと」（文学的文章）学習指導案

第２学年国語科学習指導案

指導者 [redacted]

１　単元名

「『をかし』からみた古典に表れたものの見方や考え方」

清少納言「枕草子」　（新しい国語２　東京書籍）

兼好法師「徒然草」　（新しい国語２　東京書籍）

２　単元について

（１）　本単元は、随筆に接することで生徒が自らにはない考え方や価値観に触れる活動を積み重ねることができる。その過程で、古典に表れたものの見方や考え方を理解する指導のねらいがある。「枕草子」は「源氏物語」とともに、王朝女流文学を代表する傑作であり、小学校から高等学校までの教科書に採録され「をかし」という言葉を通して古典に表れた表現の効果を考えることができる。さらに、「枕草子」と「徒然草」と読み比べることで、表現技法の効果について実感を伴った理解につなげられる。古典と自らを比較することによって、生徒が自ら「筆者想定法（倉澤栄吉と香国研で取り組まれた）」として、記述の意図を考えることで、筆者らの考えに迫ることができる。随筆の特徴を意識して、古文と現代語訳を読み深めることで、文章の構成や表現の効果を理解することにつなげる。

（２）　これまで随筆として、１学期に「字のない葉書」を学んでいる。筆者が子どもの頃に見た父親の姿と、大人になってから感じる父親の姿に違いがあるかを比べるために、筆者に届いた父親からの手紙のエピソードや家族との関わりを捉えながら、「筆者から見た父親はどんな人物であるか」という問いを立て考えた。この活動から、子どもの頃に理解できなかった父親の行動が、別の視点から考えることで家族への愛情だと気づく筆者の思いに触れることができたが、授業の振り返りでは「父は家族思いだった」という表層的な読みに留まる生徒がいた。

　また、小学校で第一段「春はあけぼの」を暗唱してきた経験があるため、本単元の導入が円滑になると考えられる。中学１年で、「伊曽保物語」や「竹取物語」を通して、歴史的仮名遣いに注意した音読や、現代語訳を参考にしながら内容を理解しようとする姿がみられた。その一方で、古文ならではの表現について理解することに困難を抱えている生徒もいる。

（３）　以上を踏まえ、次の点に留意して指導する。

○　筆者の考えに迫るための読みの工夫

①　「枕草子」と「徒然草」を比較して読む

　「枕草子」にみられる「をかし」に注目し、筆者の意図を想定し、現代語訳を手掛かりに「をかし」がどのように用いられているのか検討することによって、筆者

の意図を捉えやすくする。「枕草子」と「徒然草」を比較することで、「枕草子」の影響を受けたとすれば、どのように反映されているかを意識させていく。兼好法師のものの見方に迫るために、「仁和寺にある法師」における失敗について考えたことをもとに、「先達」とは何に対して述べたものかを考えられるよう指導していく。

② 「をかし」を複数の章段から読む

教科書に採録されている章段と別の章段もあわせて学ぶことで、「をかし」の効果について、より深く考えられるように指導する。内容を把握しやすく、簡潔にまとめられている「馬は」「月のいと明かきに」「星は」の章段を扱う。これらを各時間で継続的に「今日の『をかし』」として古文と現代語訳について触れる活動を取り入れる。この取組によって、「をかし」がどのような文脈で用いられているのか多面的な理解を深められるようにしていく。筆者は何に対して「をかし」と感じているのか、複数の視点を段階的に獲得することで、筆者が「をかし」と感じていることに対して自らはどのように認識するかを考える機会を意図的に設定する。

○ 気づきの可視化

古典に表れた筆者のものの見方や考え方をまとめる「清少納言カード」を用いる。文章の構成や表現の効果など、自らがどのような視点から筆者の考えに迫ろうとしているかを把握しやすくなる。意見を交流する際、このカードを提示することによって、根拠となる箇所を比較しながら考えを深められる。

3 単元の目標

（１） 現代語訳を手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を理解することができる。 〔知識及び技能〕（（３）イ）

（２） 「読むこと」において、観点を明確にして文章を比較し、文章の構成や表現の効果について考えることができる。 〔思考力、判断力、表現力等〕（Ｃ（１）エ）

（３） 積極的に古典に表れたものの見方や考え方を捉え、学習の見通しをもって自分の考えを伝え合おうとする。 〔学びに向かう力、人間性等〕

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①現代語訳を手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を理解している。（（３）イ）	①「読むこと」において、観点を明確にして文章を比較し、文章の構成や表現の効果について考えている。（Ｃ（１）エ）	①積極的に古典に表れたものの見方や考え方を捉え、学習の見通しをもって自分の考えを説明しようとしている。

5　単元の学習指導計画（全６時間）

時	目標	学習内容・学習活動	評価規準・評価方法等
1 (習得)	・「枕草子」の「第一段」を読んで、筆者が何に注目して「をかし」と感じているか捉えることができる。	・古文、現代語訳を通読する。 ・筆者が何に対して「をかし」と感じているかを考える。 ・「わろし」に着目して文章の構成について考える。	［知識・技能］① ノート ・筆者が何に対して「をかし」を使っているかについて考察している。
2 (習得)	・「枕草子」の「九月ばかり」を読んで、「をかし」の働きについて検討することができる。	・古文、現代語訳を通読する。 ・古文に四度記述される「をかし」の意味や用いられ方が同じか、違いがあるならなぜかを考える。	［知識・技能］① ノート ・現代語訳をもとに、「をかし」の用いられ方について考えている。
3 (習得)	・「徒然草」の「序段」を読んで、「徒然草」について知る。 ・「神無月のころ」を読んで、大まかに内容を捉える。	・古文、現代語訳を通読する。 ・「神無月のころ」を読んで、筆者がどんな体験をしたかをまとめる。	［思考・判断・表現］① ノート ・文章の構成や論理の展開から、筆者の人柄について考察している。
4 本時 (活用)	・「枕草子」の各章段から捉えた清少納言のものの見方や考え方をもとに、兼好法師の「徒然草」を読み、表現の効果について考えることができる。	・「神無月のころ」の古文、現代語訳を通読する。 ・前時までに捉えた清少納言の人柄をもとに、兼好法師の考えに対して共感するかどうかを考える。	［思考・判断・表現］① ノート ・自分の解釈した清少納言のものの見方を根拠として考察している。
5 (習得)	・「徒然草」の「仁和寺にある法師」を読んで、筆者が感じていることをまとめることができる。	・古文、現代語訳を通読する。 ・どんな失敗があるかを考え、筆者の思いについて話し合う。	［思考・判断・表現］① ノート ・文章の構成や論理の展開から、筆者の人柄について考察している。
6	・単元の振り返りとして、自分は清少納言と兼好法師のどちらの考え方に近いかをまとめることができる。	・これまでの学習で捉えた、それぞれのものの見方や考え方を踏まえて意見文を書く。	［主体的に学習に取り組む態度］① ノート ・学習によって気づいた筆者の人柄を、自分と比べながらまとめようとしている。

６　本時の学習指導

（１）　目標

・「枕草子」の各章段から捉えた清少納言のものの見方や考え方をもとに「徒然草」を読み、兼好法師のものの見方や考え方を、比較しながら考えることができる。

（２）　学習指導過程

学習内容・学習活動	予想される生徒の反応	教師の支援と評価
１　「徒然草」の「神無月のころ」を読む。		・リズムの良い古文での音読を行う。
清少納言はこの文章に共感するか		
２　学習課題について考える。 （個人→班→全体）	【共感する】 ・場所の景観のイメージ（緑や茶色）とみかんの木の雰囲気が合わないから、「わろし」である。 ・自然に対して「をかし」と捉えている清少納言にとって、人工的な囲いをしてあるのは「をかし」ではない。 【共感しない】 ・動物や人から自然の姿を守ろうとしているから、がっかりすることではない。 ・清少納言は他の人が気にかけないことにも目を向けるので、「をかし」を感じていそう。	・それぞれがまとめた「清少納言カード」を参考に考えるよう伝える。 ・清少納言が「をかし」と感じるポイントを踏まえて、考えを記入できているかを評価する（Ｂと判断する状況）。 ・Ｃと判断する状況の生徒には、山奥の家の庭に生えるみかんの木に囲いがされていることをどう思うか声かけを行う。 ・「一番共感できないのはどこだと思うか」を追発問し、清少納言独自の視点で考えさせる。
３　清少納言になりきって兼好法師にコメントを書かせる。 （個人→全体）	・みかんの木を囲っているのは「わろし」だけど、防犯意識が高いのは「をかし」だ。 ・確かに山里でも生活する人がいるのは「をかし」だけど、みかんの木を厳重に囲っているのは「わろし」だ。	・コメントを考える際、「をかし」と「わろし」という言葉を必ず使用させる。
４　本時を振り返る。	・清少納言は「徒然草」の別の章段を読んだら、また違った考えがあるのではないか。	・随筆にはいろいろな考え方や価値観があるものの、注目する言葉によって多様な捉え方ができることを確認する。